Ivanti IT/ソフトウェア資産管理の達成モデル

IvantiのIT資産管理（ITAM）とソフトウェア資産管理（SAM）の達成モデルは、ITAM/SAM マネージャーがプログラムを方向付けるのを支援する推奨ロードマップです。ITAM/SAMをすでに実施しているが、ソフトウェア監査に対応するだけの段階に留まり、そこから発展できずにいるマネージャーは、この達成モデルをロードマップとして使用できます。その結果、次のステップが明確になり、組織内の資産関連デ ータの使用を広げて、他の IT 領域の問題解決に役立てることができます。

組織の多くは、資産管理の実施にあたってビジネスケースを明確に示そうと努めています。Ivantiの達成モデルは、このような組織の取り組みを支援します。これは、次の達成レベルへ円滑に移行できるよう、解決すべき問題とその優先度を特定することで実現します。レベルを高めていくには、次の段階で成功を 収めるためにまず何をなすべきかを知る必要があります。場合によっては、ステップを 1 つ飛ばすこともできます。それでも、進歩があれば全体的により大きな成果を挙げることになります 。

はじめ

IT 資産管理の達成モデルは地図に似ています。組織はITAM/SAM プログラムを作成して実行できますが、時間の短縮を図り、事前対応型のビジネス価値を高めて提供する方法について詳しく知ろうと思えば、達成モデルが大いに参考になります。達成モデルはプログラムの方向付けを示すのに役立ち、他の IT 領域と共有できます。その結果、目標とその達成方法について共通認識が生まれます。進むべき方向が決まれば、次のステップへのロードマップが得られます。ステークホルダーのサポートを得てそれを維持するには、進む方向を明確に示す必要があります。

お客様に方向性を示すため、Ivanti は、組織が実現しうる戦略的な ITAM/SAM ロードマップの概要を示す達成モデルを作成しました。

組織によっては、このロードマップが当てはまらない場合もあります。達成モデルの目的は、ITAM/SAM チームに注力している組織を支援し、ソフトウェアベ ンダー監査への対応に終始する受け身モードから脱却 して、より複雑な問題を解決して

競争上の優位性を獲得する モードへ移行できるようにすることです。通常、ITAM/SAM プログラムに着手するのは、ソフトウェア監査などの特定の問題に対処するためです。議論の起点を得ることで、しかるべきチームは力を発揮できるようになります。

この達成モデルについて

ITAM/SAM 達成モデルは、すべての組織に該当する確定版のロードマップではありません。多くのクライアントデバイスを共同で使用する、全従業員を対象にし た BYOD プログラムを導入するなど、微妙な違いによって組織が進む方向は変わります。規制が厳しい業界の組織にも微妙な差異が存在します。データ保護と顧客プライバシーの重視は、どの IT 部門にとっても最大の推進要因だからです。

この点を念頭に置いて、それぞれのレベルが示す特性は確定されたものではなく、技術に対応して進化していくものと考えてください。データセンターのソフトウェアコンテナのような破壊的技術が公開されると、「ホッケースティック曲線」を描いて採用が急増する傾向がありますが、これも達成モデルに影響を与えます。IT の新しい使用法が定着することで、達成モデルのある属性が低下したり、陳腐化したりすることさえあります。

達成モデルを作成するときに Ivanti が直面した課題の1 つが、ITAM/SAM プログラムの次のステップを特定する組織の役割に関するものでした。これらのプログラムは IT 運用と連携させることができ、IT のソーシング管理、調達管理、ベンダー管理、契約管理と高い頻度で連携しています。

その結果、難しい状況が生まれます。ITAM/SAM に潜在的に関心を持つすべての役割のための次のステップを特定することは困難だからです。そのため、私たちは高次のレベルでモデルを作成しようとしました。さらに、このモデルは、あらゆ る規模の企業に適用できるわけではありません。小規模な組織では、ITAM/SAM プログラムの推進に必要な人員や資金を確保できない場合があります。一方、解決すべき別の緊急課題を抱えているため、一定レベルを超えたプログラムの進行は求めないことに決めた企業もあるかもしれません。地図と同様に、組織は別の道を進むことができます。

経営陣のサポートを得るには、その関心事について知る必要があります。IT のリーダーは、戦略的問題と戦術的問題のバランスを取ることを日々求められてい ます。達成モデルの各レベルは、コスト、時間枠、サービス品質、リスクに及ぶ影響を示します。リスクの対象には、監査とコンプライアンスの両方が含まれます。低い達成レベルがもたらす影響を経営陣が認識すれば、ビジネス価値を証明しやすくなります。

達成モデルは、ITAM/SAM の有効な統制の構成要素（ガバナンス、ポリシー、プロセス、従業員、評価基準、自動化、事業方針との連携）を考察することから始まります。

レベル 0：非管理

資産管理に入門レベルは存在しません。非管理レベルの特性を示すために多くの時間は割きません。というのも、このレベルでは、ITAM/SAM が体系的に行われていないからです。

組織が ITAM/SAM を導入していない理由はさまざまです。たとえば、ビジネスが非常に小規模である、高度に分散している、注目度の高 い問題がほかにあるため、ITAM/SAM は優先事項と見なされない、十分な人員を確保できない、成長モードに入っていない、などが考 えられます。このレベルでは、組織が IT のロードマップや方向性を作成することは困難です。多くの場合、十分なリソースやスタッフ、資金を確保できないからです。

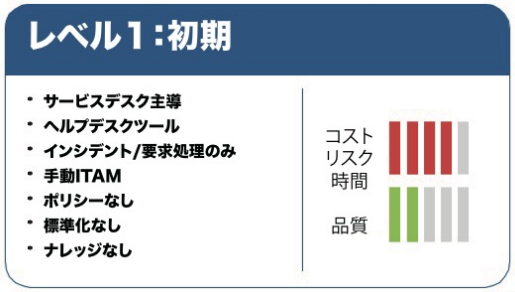
通常は、サプライヤを通じてソフトウェアを購入して 新しいハードウェアにインストールします。必要に応じてアプリケーションを追加購入しますが、このレベルでは、コストを重視する多くの組織が、追跡や保護が不要なクラウドベースまたはオープンソ ースのアプリケーションを求めることになります。

ハードウェアのライフサイクルは可視化されていないため、極端に走る傾向が見られます。資産の使用期間を調べる者は存在せず、ユーザーが交換を要求するため、資産は頻繁に更新される場合があります。その一方で、廃止日付を調べる正式なプロセスが存在しないため、資産がはるかに長く使用される環境もあります。この場合は、資産が壊れるか、アプリケーションのパフォーマンス速度と旧式モデルの制約されたストレージのせいでユーザーが不満を募らせるまで資産は使用されます。

このレベルでは、潜在的に高度に仮想化された、データセンターのソフトウェアが組織にもたらすソフトウェアライセンスのリスクに対する認識がありません。ガバナンス、スタッフ配置プロセス、ポリシー、評価基準など、ITAM/SAM プログラムの他の属性は、このレベルでは考慮されていません。その結果、コストとリスクの増大、時間枠の拡大、サービス品質の低下が見られます。

レベル 1：初期

ITAM/SAM プログラムを開始する Ivanti のお客様の大半は、この初期レベルにあります。これらの企業は、組織的な対処を必要とする問題を認識しています。この認識に至る原因は、ソフトウェアベンダーの監査や、機密データを保管したモバイルデバイスの紛失などさまざまです。



達成モデルの第 1 段階では、多くの場合、クライアントデバイスから認識が芽生えます。すべてのユーザーとその関連デバイスを手作業で調べるのは困難な場合があるため、資産の追跡を支援するためにスプレッド シートやデータベースを使用します。スプレッドシートは効率的なワークグループソフトウェアではないため、1 人のユーザー（通常はヘルプデスクの担当者）が所有して、データの入力および管理とその正確さについて責任を負わなければなりません。

集中型の管理策やプロセスがない場合は、資産追跡プロセスを制御するのが困難なことがあります。ユーザーと IT 部門の行動は、対処を必要とする最新の課題や試練に向けられがちです。その結果、ガバナンスの欠如や人員不足が発生し、プロセスとポリシーは基本的なものに限られ、評価基準は機能していません。

ソフトウェアのダウンロードや評価に関するポリシーを明確に定めなければ、エンドポイントにインストール済みのソフトウェアを可視化することは困難です。ネットワークのパフォーマンスやセキュリティなど、他の目的でインストールしたツールを利用してインストール済みのソ フトウェアを確認することも珍しいことではありません。こうしたツールは ITAM/SAM 用に設計されたものではないため、データや詳細に欠落が生じるおそれがあります。

このレベルでは、標準のデバイスタイプやアプリケーションが確定し ていません。そのため、スペアパーツのインベントリを保持することが困難であり、サポートコストの上昇を招きます。サポート技術者は 多くのデバイスタイプとアプリケーションに精通しなければならず、要求解決の所要時間が長くなり、報告を必要とする場合もあります。購買要求の履行に過大な時間を要するようになると、時間枠が拡大 したことや要求に対する IT 部門の対応が遅いことについて、ユーザーが不満を表すようになります。これは満足度の低下をもたらします。都度購入は、大口販売価格による値引きや有利な支払い条件の機会を組織から奪い、許容限度を超えたコストの上昇を招きます。

テクノロジ重視の組織を除き、データセンターのハードウェアとソフトウェアの追跡に企業が関心を向ける ことはほとんどありません。しかし、実際にはそうした購入が最大の資金消費源となっています。データセンターについては、クライアント側と一線を画して、プロセスやツールを活用することにほとんど興味を示しません。

このレベルでは、コストとリスクの増大、時間枠の拡大、サービス品質の低下が見られます。エンドユーザーをサポートするリソースを確保できない場合、事実上、エンドユーザーは効率的に仕事をこなすことが難しくなります。ITAM/SAM の有能な専門家に求められる、文書で十分に裏付けられたスキルが不足していることを考慮して*、多くの企業は、社内スタッフにトレーニングを施し、欠けている役割を果たすことで成 功を収めています。プログラムへのスタッフ配置で必要とされる人数を決める秘訣はありません。ただし、 プログラム実施の初期段階では、スタッフを多めに配置する傾向があります。したがって、スタッフの共有を必要とする場合は、ステークホルダーのサポートを取り付けることが不可欠です。

レベル 2：管理

管理レベルでは、IT 部門の能力について企業が確信を持てるよう、すべての ITAM/SAM プログラムの達成を目指します。完全な文書化が行われず、IT 部門に十分に定着していない場合、事業部門は、リスク やコストが高すぎること、期間が長すぎること、その一方でサービス品質は低いことに気づきます。事業部門の不満が高まると、ITAM/SAM プログラムは、高額な監査やセキュリティ違反を経た末に、アウトソーシングの対象となります。

このレベルに至ると、かなりの量のリソースを必要とします。経営幹部は全面的に支援し、忍耐強く教訓を学び、場合によっては学び直す必要があります。ガバナンス、ポリシー、プロセス設計、スタッフ配置、ツール、評価基準への投資が必要となります。ツールがなくても利点は得られますが、手作業の多くを完全に自動化するにはITAM/SAM ツールが必要です。

この段階での最初のステップは、ガバナンスに対処することです。達成モデルのレベルを高めていくには、強力なガバナンスが欠かせません。ガバナンスで必要とされるものは何でしょうか。誤解を避けるため、ガートナー社によるガバナンスの定義を示します。

IT ガバナンス（ITG）は、組織がその目標を達成できるように、IT を効果的かつ効率的に使用するプロセスと定義されます。IT 要求ガバナンス（ITDG — IT が取り組むべき対象）とは、競合する IT 投資の効果的な評価、選択、優先順位づけ、資金調達を組織が確実に行い、その実施状況を監督して、（測定可能な）ビジネス上の利益が得られるようにするプロセスです。ITDG は設備投資の意思決定および監督プロセスであり、経営陣が責務を負います。IT 供給側ガバナンス（ITSG — IT がその業務を遂行する方法）とは、IT 組織が準拠した方法で効果的かつ効率的に機能するように取りはからうものであり、主として CIO が担当します。
http://www.gartner.com/it-glossary/it- governance/

経営陣は、戦略的なメリットが得られることを認識して ITAM/SAM プログラムを支援します。それでも、プログラムが成功すれば、得られたメリットが月 1 回または 3 カ月に 1 回のペースで経営陣および事業部門への売り込みに使われることになります。IT のインフラが企業を支えている限り、ITAM/SAM の必要性は揺るぎません。

プログラム成功の次のステップは、適格な人材をスタッフとして配置することです。人員は、すでに非公式 に職務を支援しているサポートチームの既存リソースから内部募集することも、外部の人材を採用することもできます。外部から雇用する場合は、最低 6 カ月間の計画を立てます。

このレベルでは、ポリシーを適用する必要があります。しかし、一般にポリシーの対象となるのはエンドユーザーの行動であり、その例として、ハードウェアデバイスの物理セキュリティ、ソフトウェアのダウンロード、ソフトウェアの評価版などの領域で許容できる企業活動をエンドユーザーに知らせることが挙げられます。こうしたポリシーは、IT 部門とエンドユーザーの両方に適用しなければなりません。管理者権限を持つ IT スタッフにも、エンドユーザーと同様にリスクを引き起こすおそれがあることを知らせる必要があるからです。規制が厳しい業界など、一部の組織ではポリシー厳守の企業文化を容易に打ち出すことができます。とはいえ、エンジニアリングや IT などの他の企業では、ユーザーの行動を規制してもうまくいきません。

ITAM/SAM のプロセス設計における最も効果的な戦略は、既存のプロセスを調べて、組織全体で標準化できるベストプラクティスがないか確認することです。多国籍企業では、サプライヤ、送料などが多岐にわたる ため、標準化されたプロセスをグローバルに確立することは困難です。既存プロセスの再検討を通じて、資産ライフサイクル内の位置に基づくプロセスの評価が可能になります。

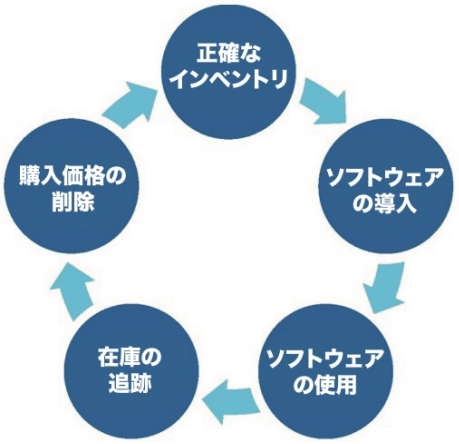
資産ライフサイクルには、以下に示す 5 つの段階があります。

1) 調達
2) 受領
3) 実装
4) 運用、保守
5) 破棄

このライフサイクルで最も長期にわたり、最も大きい変化を示す段階が「運用、保守」です。というのも、資産はそのタイプに応じて 2 年、3 年、5 年、あるいはそれ以上にわたって使用されるからです。定型業務処理システム（SoR）のペースレイヤーの定義（ガートナー社によるペースレイヤリングの調査を参照）に属するエンタープライズソフトウェアでは、ライフサイクルが 10 年以上にわたる場合があります。

ITAM/SAM プログラムの効果を大きく左右するのがプロセスです。プログラム成功の 80%は、プロセスの設計、効率性、順守によって決まります。従業員がプロセスを順守しない場合は、可視性とデータの正確性を維持するのが難しくなります。集中型の ITAM/SAM プログラムは（交渉を経た契約に反する分散的な購入がある場合も含めて）、すべての IT 領域にまたがるという点で、他の IT 共有サービスと似ています。

評価基準は、すべての ITAM/SAM プログラムに必須のものです。これにより、プログラムの成果を把握し、継続的な改善をもたらす機会を見いだすことができます。評価基準によって、パフォーマンスが 期待に応えるものであるか、背くものであるか、または期待を超える ものであるかが判定され、改良の余地がある領域が明らかにされます。「初期」または「非管理」レベルの環境のベースラインを使用して、より詳細な問題中心の評価基準を「管理」レベルとその後続レベル で作成するのが理想的です。とはいえ、評価基準を導入するのに遅すぎるということはありません。時間、コスト、棚卸評価額などの要素を測定する、ハードウェアとソフトウェアの基本的な評価基準により、購入、導入、変更管理の決定を可視化できます。



ITAM/SAM プログラムを開始するユーザーは、インベントリ、時間、コストに対応した評価基準に取り組むことをお勧めします。これらの評価基準は、非効率な箇所を明らかにします。

このレベルでは、適切なツールを使用して手動プロ セスを自動化し、他のアプリケーションへの統合を 図ることで、包括的なプログラムを 実現します。原則的に、信頼性の高いディスカバリツールが必要と なります。このツールにより、企業ネットワークに 接続されている資産をすべて検出し、そのインベントリを作成できます。インベントリに は、クラウドベースの資産が含まれることもあります。こうしたツールの使用により、管理を必要とする資産のベー スラインが構築されます。

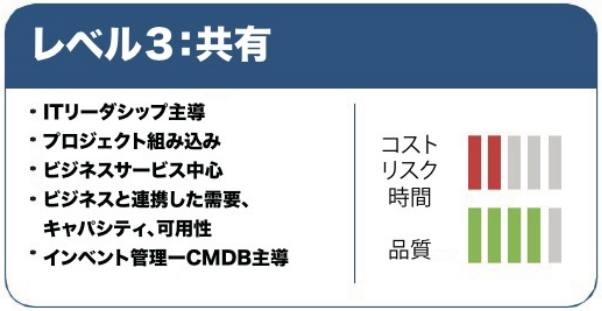
これまで、組織はソフトウェアを実行する資産の管理に専念してきました。モノのインターネット（IoT） の導入と普及は、資産の定義に大きな影響を与えています。今日の定義範囲には、データを保管できる資産や IP アドレスを持つ資産、さらにはセキュリティリ スクをもたらす資産も含まれます。こうした資産には、BYOD（個人所有端末の業務使用）、パブリッククラウドのアプリケーション、WiFi 対応のローカル接続のプリンタ、その他多くのものがあります。

ディスカバリツールに加えて、財務および契約データの情報ハブとして機能する ITAM/SAM データベースが、自動化の実現に重要な役割を果たします。多くの 場合、ITAM/SAM データベースは調達システムと最初に統合されるため、発注書のデータを資産記録へ自動的に取り込むことができます。受領済みの資産を把握するため、ソフトウェア再販業者などの主要サプライ ヤへの統合も重要です。この 3 つのソースから得たデータを統合することで、企業は配布情報と許可情報の違いを速やかに把握できます。サービス管理と連携させることで、ベンダーがインシデントに適切に対応しているかどうか、問題チケットは未解決か解決済みかを可視化できます。

このレベルではコストとリスクを毎年予測できるため、その実態が明らかになります。さらに、時間枠は適度なものとなり、サービス品質が向上します。企業はIT に自信を持ち、エンドユーザーは効果を上げるのに必要なサポートリソースが与えられていると感じています。

レベル 3：共有

この共有レベルでは、チームミーティング、エグゼクティブダッシュボードのレポート、ツール統合などによるデータ共有を通じて、ITAM/SAM マネージャーが他部門と効果的に協力する能力が問われます。IT 領域を横断的に可視化することで、効率化へ向けたハイレベルの目標を支援します。効率化はまた、IT 部門が戦略的なロードマップと変革の試みを果たす機会を与えます。



このレベルは大きな利点をもたらします。多くの場合、人員追加への継続的な投資が行われ、それが目標達成に有利に働いています。実際には、このレベルではコスト、リスク、時間枠の減少が始まり、その一方でサービス品質は上昇しています。より早い段階で見られた、ガバナンスやポリシーに関する受け身の問題の多くは解決して います。

ここで重点的に取り組むのは、スタッフの配置と、効果的な チームワークによるコミュニケーションの促進です。組織によっては、領域固有の管理という考え方（「ヒーローの文化」）から、情報とデー タを共有するオープンなアプローチへの文化的な転換を図る必要があります。この種のコラボレーションをスタッフレベルで可能にするには、職務記述書や業績評価を書き改めて、スタッフが経営陣の指示に従うようにする必要があります。組織は新しい技術を絶えず取り入れているため、プロセスとツールの更新が必要になることもあります。とはいえ、時間およびコスト面で困難な活動の多くは、「管理」レベルで済ませておくべきです。ここでの重点項目は、ビジネスサービスの継続的な提供を実現することです。その際、サービスを実行しているのがクラウドであるか、オンプレミスであるか、データセンターにあるソフトウェアコンテナであるかは問いません。セキュリティ、保守およびサポート、事業部門、災害復旧、エンタープライズ設計、戦略立案の各部門は、互いの課題、方向性、目標、重要な成功要因、主要業績評価指標（KPI）について理解し、部門間でデータを共有できるよう協力します。

このレベルでは評価基準も進化します。評価基準はサービス重視となり、データをよりよく分析する能力に基づきます。ほとんどの組織は、内部顧客と締結したサービスレベルアグリーメントを持っています。たとえば、SLA は資産関連のリクエストを完了させるための時間だけでなく、可視化の向上をサポートするよう調整されます。これは結果として、ベンダーのパフォーマンススコアカードの作成や、従来の ITAM/SAM の枠を越えて災害復旧と事業継続計画の作成につながります。

財政的な観点から見ると、このレベルは、企業および事業部門のさまざまな IT 予算を着実に削る最良の機会をもたらします。この着実な節約は、交渉戦略や購入価格に伴う直接的なコストだけでなく、ビジネスの成果を後押しするハードウェア、ソフトウェア、サービスの管理コストにも及びます。節約を実現するには、データセンター、クラウド、ホストされる資産を含む ITAM/SAM 戦略を策定する必要があります。IT 支出の大きな割合をデータセンターが占めているため、すべてのサーバー、仮想マシン、ソフトウェアコンテナ、インストール済みのソフトウェアを検出できるようにすることで、必要不可欠な可視化が実現します。ガートナー社の予測によると（2016 年 7 月 5 日、ID：G00296930 を参照）、データセンターの支出の伸びは 2016 年に 1,750 億ドルに達し（1.6%の複合年間成長率）エンタープライズソフトウェアの支出は 3,320 億ドルにのぼります（6.8%の複合年間成長率）。可視化はコスト抑制に不可欠です。

エンタープライズソフトウェアの支出が増えていても驚くにはあたりません。エンタープライズソフトウェアは、ビジネスインテリジェンス、データ分析、モビリティ、テクノロジ近代化、セキュリティ、クラウド採用、その他多くの要因で技術的な優位性を得るために使用されているからです。組織は、柔軟性の向上をソフトウェアサプライヤに求めています。コンテナや 仮想化されたクラウド、ハイブリッドクラウドでのソフトウェア実行や、パブリッククラウドのインスタンス間でのソフトウェアモビリティを可能にするには、サーバーや地理的条件に縛られない、必要に応じて移動できるソフトウェアが欠かせません。

IT 部門が直面している最大級の課題は、ビジネスに成果をもたらさない、ユーティリティ項目という IT の認識をいかにして克服するかということです。こうした見方は、デジタルビジネス戦略を採用する企業が増えるにつれ、徐々に影を潜めています。

IT の有効性に関する議論が詳細な財務データで裏付けられると、会話のトーンは瞬時に変わります。チャージバック（課金）と財務的にその対をなすショーバック（コストの提示）は、実際の IT コストを事業部門に示すために使われます。ネットワークインフラは保守と更新を必要とし、アプリケーションのパフォーマンスモニターは事前に問題を特定してこれを修正します。しかし、事業部門は購入コストだけに目を向けて、IT のサポートインフラには関心を寄せません。

サービスの提供にかかるコストが提示されることで、事業部門は、IT 部門に求める SLA について意識を高めることができます。期待される利益とコストが一致しない場合、そのプロジェクトは再評価する必要があります。コストの抑制は、1 つのレポートで実現します。多くは実施されていないものの、チャージバックは実用性を超えた存在に IT を高めるもう 1 つの方法です。これが特に功を奏するのは、事業部門が新しいプロジェクトの実現を IT 部門に求めているときです。

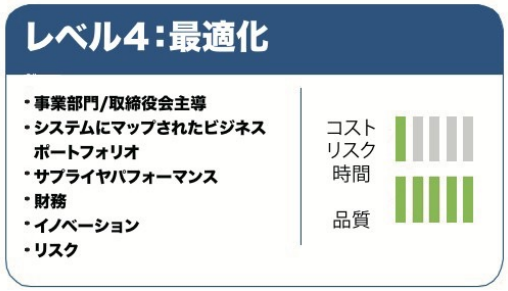
このレベルを特徴付けているのが自動化と統合です。さまざまなコラボレーション領域の全体で、それぞれに固有のツールが、サービスデリバリー部門の所有する構成管理データベース（CMDB）に統合されます。

このレベルではコストの予算計上が容易になり、リスクの予測、時間枠の大幅な短縮、サービス品質の向上が実現します。パートナーを 組み、チームとして目標を達成できるよう支援する IT 部門の能力に、事業部門は確信を抱きます。

レベル 4：最適化

ITAM/SAM 達成モデルでは、この最適化レベルが達成可能な最高レベルとなります。組織は、IT リーダーにとって悩みの種だった多くの問題をすでに解決しています。早期に見られたリアクティブな問題は解決しているため、ガバナンスとポリシーは懸案事項ではなくなっています。各チームはすでに協力関係にあるため、スタッフ配置が課題となることもありません。組織は新しい技術を絶えず取り入れているため、プロセスとツールを適応させなければならないこともありますが、考え方の文化的な転換がレベル 3 の「共有」ですでに行われているため、それが問題となることはありません。

達成モデルを通して進化し続けている領域が評価基準 です。資本支出（CAPEX）に対する営業経費（OPEX）、予算に対する実コストな ど、財務上の評価基準を出発点として提案します。しかし、実際に は、企業はそれぞれの目標に沿った測定手段を持つことが予想されます。この達成レベルでは、期待されるビジネス成果を出していない、 裁量的経費と義務的経費も明らかにすることができます。このレベルでは、ITAM/SAM データが提供する IT 財務管理を連携させて、戦略上のさまざまな意思決定活動を実現することに重点を置きます。これらの活動は必ずしもITAM/SAM 関連ではありませんが、ビジネスの俊敏性を高めるものです。



ビジネスの俊敏性は、DevOps 、SecOps（セキュリティ運用）、ITAM/SAMOps のすべてを統合したプロセスとツールが、環境とそのパフォーマンスに関するデータをリアルタイムで共有することで実現します。事業部門は、 IT 部門が陰で働いていることに気づきもしないというのが最良のシナリオです。このレベルの俊敏性を実現するには、完全に運用可能な ITAM/SAM プログラムと ITSM プログラムを通じて提供されるビジネスサービス間で、緊密な連携を図る必要があります。

このレベルに到達した組織は、ここに至る各段階（レベル）で成し遂げたすべての作業に基づいて、予測可 能な支出を行うことができます。ITAM/SAM マネージャーと事業部門の間で毎月実施するミーティングにより、想定外の事象や最終段階での要求が起きないよう努めます。ITAM/SAM を使用することで、リース、購入、クラウド、オンプレミス、仮想のすべてにわたって、将来のソフトウェアとハードウェアのニーズを予測できます。

新しいプロジェクトが始動した場合、ITAM/SAM はその計画段階から関与し、契約、製品、サプライヤはすでに機能しています。人員の削減が予期されている場合は、ITAM/SAM によってハードウェア資産の残存耐用年数が確認され、残余価値が明らかにされます。または、使用しなくなるソフトウェアの保守を解約できます。ソフトウェアの転売が可能なヨーロッパ、中東、アフリカでは、譲渡可能なソフトウェアとその価値をITAM/SAM によってあらかじめ知ることができます。

予測可能な支出と予想に加えて、IT 需要に基づくリアルタイムライセンスを行うことができます。IT 部門は、BYOSL（Bring Your Own Software License） モデルか、クラウドプロバイダが提供するソフトウェアを使用して、最も効果的なプラットフォームを適正 価格で入手するために必要なデータを収集し、その情報に基づいて決定を下します。これが特に該当するのは、多数のパブリッククラウドのインスタンスを抱えて、地域、プライバシー法、その他の要因に基づいて最適価格を求めているグローバルな組織です。

クラウドインスタンスやソフトウェアの移動、リアルタイムライセンスにより、組織は節約を達成します。IT 部門は需要急増の可能性がある領域を把握し、クラウドの割引価格競争をうまく利用できるからです。需要、キャパシティ、支出を予測するには、予算目標、実コスト、資本支出、営業経費、固定費、変動費、同じ規模の組織を基準にしたベンチマーク、 IT におけるその他の財務上の評価基準と照らして、環境のパフォーマンスを把握する必要があります。ベンチマークデータは、サービスに取り込めるときや詳細レベルを階層化できる場合にとりわけ有用です。俊敏性の高い ITAM/SAM プログラムは、IT 部門がコスト効率の良し悪しを判断するのに役立ちます。

このレベルを特徴付けているもうひとつの要素は、クラウドとオンプレミスの両方のアプリケーションを含む、企業全体のアプリケーションポートフォリオを組織的に最適化できることです。需要はビジネスの変化と直結しているため、IT 部門は、パブリッククラウドのアプリケーションでリアルタイムライセンスを活用できます。サブスクリプションライセンスは、実行している機能の消費量について洞察をもたらし（ビュー、アクションなど）、組織は消費量に応じて課金されます。

このレベルでは、コストとリスクは抑制され、毎月予測されます。時間枠はほぼリアルタイムとなり、高いサービス品質を実現しています。事業部門と IT 部門は、同じ目標に向けて連携します。

まとめ

Ivantiが求めるITAM/SAM達成モデルは静的なものではなく、すべての組織に適用できるものでもありません。テクノロジとビジネスの進化に呼応して、このモデルも進化していきます。その目的は、とるべき次のステップとその理由について考察を始める組織を支援することです。プロセスのフレームワークを併用することで、どのように取り組むべきかという問いへの答えが用意されます。ここで留意すべきなのは、達成モデルのレベルを高めていくには、成果を挙げるために専用のリソースと取り組みが必要になるという点です。

ivanti.co.jp
03-6432-4180
contact@ivanti.co.jp

Copyright © 2022, Ivanti. All rights reserved. IVI-1713 IVI-1713 IT Software Asset Model Attainment Model